

《原著》

# 訪問看護師の看護学士課程を学修する学生に対する期待について ～自由記載による内容分析の結果～

鍋島 純世, 又吉 忍, 牧 理砂, 西村 純子

相山女学園大学看護学部

## 要 旨

【目的】訪問看護師の看護学士課程を学修する学生に対する期待の内容について明らかにすることとした。

【方法】訪問看護師に対しアンケート用紙を郵送し、看護学士課程における卒業時到達目標を印刷したアンケート用紙を参照にして、期待していることについて自由記述により回答を求めた。

【結果】訪問看護師203人中、164人に調査協力を得ることができた。訪問看護師の学士課程を学修する学生に対する期待は、【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】【看護学生に対する思い】【新卒訪問看護師育成に対する課題】の5つのカテゴリで構成された。

【結論】訪問看護師は、【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】といった訪問看護師になるために必要な内容を看護学生に求めている。また【看護学生に対する思い】のように、看護学生に将来を期待するが故に看護職者になる者の責任や自覚の必要性を指摘する側面が示された。そして【新卒訪問看護師育成に対する課題】のように、新卒訪問看護師育成に対して不安や困難感といった否定的な感情を抱いているという課題が明示され、その背景には実習での学生の言動が反映されていることも予測でき、今後大学としては実習施設との連携を強化し、教育機関の役割を十分果たすための検討が必至であることが示唆された。

キーワード：訪問看護師、看護学生、期待

## I. 緒言

他に類を見ない速度で高齢化が進行する我が国において、社会保障政策の最重要課題の一つが持続可能な医療・介護の制度設計であり、そのうち在宅ケアの基盤整備が非常に重要である。このような背景のもと、訪問看護に関連する3つの団体「公益社団法人日本看護協会」、「公益財団法人日本訪問看護財団」、「一般社団法人全国訪問看護事業協会」が中心となり訪問看護が目指す姿とその達成に向けて「訪問看護アクションプラン2025」が策定された<sup>1)</sup>。その中では、在宅療養者の急増・重度化・多様化・複雑化が懸念されており、プランの一つに「訪問看護の量的拡大」を掲げ、新卒看護師が訪問看護師を目指すことができる教育モデルを確立し、新卒の訪問看護師を確保するという内容が明記されている。このような現状を踏まえて、訪問看護ステーションにおける新卒訪問看護師教育プログラムの作成と普及のために、現場と教育機関が連携して活動し

ている状況がここ数年報告されている<sup>2)-5)</sup>。

文部科学省が平成23年に「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会最終報告」にて「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を提示している<sup>6)</sup>。これは、看護学士課程を修了する学生が修得すべき必要不可欠なコアとなる教育内容を示すことを目指し、社会や医療、看護の変化に対応するために作成されている。各大学は、この「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を参照に独自の教育課程を編成することが求められている。しかし、新卒看護師の採用を積極的に考えている訪問看護ステーションが38.9%あったのに対し、新卒看護師が訪問看護ステーションに就職することに対して肯定的と回答した教員は21.9%であり、在宅看護現場のニーズに教育機関側が十分に応える体制がとれていないことが指摘されている<sup>3)</sup>。新卒訪問看護師の育成における訪問看護師と教員などの交流会では、大学等との連携の重要性や基礎教育における生活者の視点や看護観獲得の重要性の認識などが指摘されており<sup>2)</sup>、今後ますます教員の新卒訪問看護師育成に向けての意識改革が重要視されることは必至である。

しかし、現場の訪問看護師が、看護学士課程を学修する学生（以下「学士課程学生」と略す）に対して期待する詳細について調査された報告は知る限り見当たらない。学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標を現場の訪問看護師に示し、その上で新卒看護師として訪問看護ステーションに就職する可能性のある学士課程学生に対して、訪問看護師はどのような思いを抱いているのかを把握することは、在宅看護現場のニーズを詳細に捉えることとなり、教育機関側が現場のニーズに応えるための基礎資料になると考えられる。そこで本研究は、訪問看護師の看護学士課程を学修する学生に対する期待の内容について明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究対象者

一般財団法人Aに在籍する訪問看護師203人を調査対象者とした。

### 2. 調査方法

郵送によるアンケート調査を実施し、返信用封筒による郵送にてアンケート用紙を回収した。調査期間は2017年5月中旬から6月末であった。

### 3. 調査内容

#### 1) 基本属性（7項目）

年齢、性別、看護師経験年数、訪問看護師経験年数、役職、勤務体系、学生指導経験の有無について質問した。看護師経験年数と訪問看護師経験年数は共に、「1年未満」、「3年未満」、「5年未満」、「10年未満」、「20年未満」、「20年以上」から回答を得た。役職は、「管理職である」、「管理職ではない」から回答を得た。勤務体系は、「常勤」、「非常勤」から回答を得た。

#### 2) 訪問看護師の期待（1項目）

看護学士課程における卒業時到達目標を印刷したアンケート用紙を参照して、学士課程学生に期待していることについて自由記述により回答を求めた。

### 4. 分析方法

訪問看護師の学士課程学生に対する期待についてありのままを記述したものを生かすために、「内容分析」による方法を用いた。訪問看護師による自由記述を熟読し、内容が一文一義である

ように意味を損なわない範囲内で区切り、抽出し、コード化した。コード化した意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化し、意味内容が類似するものをまとめてサブカテゴリー化し、さらに抽象度を高めカテゴリー化し、名称を付与した。

データ分析の信頼性・妥当性を高めるために、質的研究に精通した研究者から、要約やカテゴリー化などが適切に行われているか、一連の過程についてスーパービジョンを受けた。分析過程において、分析した結果が記述された意図と異なっていないかについて、共同研究者間で繰り返し検討し、分析結果の見直しを行った。

## 5. 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究目的、調査方法、個人情報の保護、調査は無記名回答であり拒否する権利があること、データの保管方法などについて文書にて説明し協力を依頼した。自由意思に基づくアンケート調査であり、返送した者を同意した者とみなし、返送後の調査研究協力の同意撤回・辞退は受け付けることができないことも合わせて文書にて説明した。本調査は相山女学園大学看護学部研究倫理審査委員会にて2017年2月に承認を受けた（受付番号162）。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象者の背景

一般財団法人Aに在籍する訪問看護師203人中、164人に調査協力を得ることができた。結果は表1の通りであった。

### 2. 訪問看護師の学士課程学生に対する期待

【 】はカテゴリーを、< >はサブカテゴリーを、「 」は研究対象者の回答の引用を示す（表2）。

訪問看護師の学士課程学生に対する期待は、【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】【看護学生に対する思い】【新卒訪問看護師育成に対する課題】の5つのカテゴリーで構成された。

【訪問看護師に必要な看護技術】は、<一人で判断する能力><基本的看護技術の習得><総合的なアセスメント能力><コミュニケーション能力の習得><臨機応変な工夫><制度の理解><終末期の経験><期待に沿ったケアを展開する能力>の8つのサブカテゴリーから構成された。「基本的な技術とその意味を理解することが必要である」というように基本的看護技術は重要であるが、そのみではなく統合して療養者を捉え支えるための多面的な看護能力として「他医療機関、特に医師・ケアマネともしっかりとアセスメントをして情報を伝え指示をもらわなければならない。」といった他職種間との連携協働における訪問看護師の役割遂行など、地域包括ケアシステムという制度の中に訪問看護師が存在している意味を理解することについて、訪問看護師は期待していた。また、「訪問看護は、一人で利用者宅へ行き看護を実施するため、判断が重要である。」や「その時間に期待に添ったケアを展開する力が必要である。」といった一人で訪問する際に求められる瞬時の判断やその判断によって適切なケアを提供できる能力など、在宅特有の看護実践能力について訪問看護師は期待をしていた。

【訪問看護師に必要な資質】は、<価値観の尊重><信頼関係の重要性><個別性の尊重><感性の積み上げ>の4つのサブカテゴリーから構成された。「様々な価値観がある為、尊重する。」や「相手の思いを聞く事を、聞ける心の余裕が持てるようにする事を大切にしている。」とい

表1 対象者の背景

N=164

項目		N	(%)
年齢	30歳代	19	(11.6)
	40歳代	60	(36.6)
	50歳代	72	(43.9)
	60歳代	13	(7.9)
性別	男性	1	(0.6)
	女性	163	(99.4)
看護師経験年数* <sup>1</sup>	1年未満	1	(0.6)
	3年未満	1	(0.6)
	5年未満	6	(3.7)
	10年未満	17	(10.6)
	20年未満	62	(38.5)
	20年以上	74	(46.0)
訪問看護師経験年数* <sup>2</sup>	1年未満	7	(4.3)
	3年未満	26	(16.0)
	5年未満	20	(12.3)
	10年未満	27	(16.6)
	20年未満	60	(36.8)
	20年以上	23	(14.1)
役職	管理職	15	(9.1)
	管理職でない	149	(90.9)
勤務体系	常勤	62	(37.8)
	非常勤	102	(62.2)
学生指導経験* <sup>1</sup>	あり	128	(79.5)
	なし	33	(20.5)

注\*<sup>1</sup>: 3名の欠損値を除外したためN=161注\*<sup>2</sup>: 1名の欠損値を除外したためN=163

うように、訪問看護師は在宅で特に重要視される対象者の価値観や個別性を捉え受容し、人間性を培っていくことを期待していた。

【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】は、＜現場における在宅看護論の確立＞＜現場で学ぶ意識＞＜自信につながる指導＞＜現場スタッフの日々の努力＞の4つのサブカテゴリーで構成された。訪問看護師は、「実際に現場で働いて学ぶことが多いと思う。」や「学校で学ぶことのできない部分は現場で学ぶ気持ちさえあればと思う。」というように、現場で自己研鑽のため意識を持ち行動する姿勢を、学士課程学生に対して期待していた。そして「指導力のある先輩や自分を守ってくれる管理職がいる事で、したことのない援助やアセスメントも自信をもって行うことができる。」という自信につながる指導体制を受けながら、「私達現場のスタッフがスキルを上げていく努力も必要だと感じる。」のように、学士課程学生への期待と共に訪問看護師自身の自己研鑽の必要性を感じていた。

【看護学生に対する思い】は、＜看護学生に対する期待＞＜学生の質の低下への危機感＞の2つのサブカテゴリーで構成された。「しっかり勉強して自信を持って働けるよう頑張ってください。」といった応援にも近い期待をする一方、「毎年、学生が実習に来るが、年々、人間としての質・社会人としての質の低下を感じる。」「訪問看護は病院の様な華やかさややりがいを見い出せないのか、やる気のない生徒が多い。」のように、学士課程学生としての自覚の希薄化に危機を



表2 訪問看護師の学士課程を学修する学生に対する期待

N=164

【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	【具体的な回答例】
訪問看護師に必要な看護技術	一人で判断する能力	訪問看護は、一人で利用者宅へ行き看護を実施するため、判断が重要である。 とにかくその場その場で判断し行動していく事が常に求められる。
	基本的看護技術の習得	基本的な技術とその意味を理解することが必要である。 在宅の場で学ぶ事よりも、看護師として基本的な部分の学習が必要である。
	総合的なアセスメント能力	総合的なアセスメント能力。 他医療機関、特に医師・ケアマネともしっかりとアセスメントをして情報を伝え指示をもらわなければならない。
	コミュニケーション能力の習得	コミュニケーション能力を身につけてほしい。
	臨機応変な工夫	必要物品も家庭にある物を工夫して臨機応変に行う知恵も必要である。
	制度の理解	しっかり制度理解がないと、地域につながらない。
	終末期の経験	終末期においては経験が必要である。
	期待に沿ったケアを展開する能力	その時間に期待に添ったケアを展開する力が必要である。
訪問看護師に必要な資質	価値観の尊重	様々な価値観がある為、尊重する。 自分自身の価値観や尺度を幅広く成長させる必要がある。
	信頼関係の重要性	患者・家族との信頼関係をつくる事が大切だといつも痛感している。
	個別性の尊重	個性・在宅看護を学んで下さい。 相手の思いを聞く事を、聞ける心の余裕が持てるようにする事を大切にしている。
	感性の積み上げ	感性豊かな幅広い経験を積み上げて下さい。
現場で在宅看護を学ぶ姿勢	現場における在宅看護論の確立	実際に現場で働いて学ぶことが多いと思う。 新人時代に多くの症例、病棟で経験を積んでいくことで自信もつき、看護論も確立していくと思う。
	現場で学ぶ意識	卒業時の到達目標よりも働きながら意識して学んでいただきたい。 学校で学ぶことのできない部分は現場で学ぶ気持ちさえあればと思う。
	自信につながる指導	指導力のある先輩や自分を守ってくれる管理職がいる事で、したことのない援助やアセスメントも自信をもって行うことができる。
	現場スタッフの日々の努力	私達現場のスタッフがスキルを上げていく努力も必要だと感じる。
看護学生に対する思い	看護学生に対する期待	しっかり勉強して自信をもって働けるよう頑張ってください。 将来を受け継いで下さる皆様に期待している。
	学生の質の低下への危機感	毎年、学生が実習に来るが、年々、人間としての質・社会人としての質の低下を感じる。 訪問看護は病院の様な華やかさややりがいを見い出せないのか、やる気のない生徒が多い。
新卒訪問看護師育成に対する課題	新卒訪問看護師育成に対する不安	現場の教育者の育成にも力を入れなければならないと思う。 事故や失職、ストレスも大きく、一緒に働くこと・未来に指導していくことに不安がある。
	新卒訪問看護師育成に対する困難感	新卒で訪看を実践するには、かなりスタッフの数が充実した施設でないと困難だと思う。 新卒ですぐに訪看をする事は大変な事だと考える。 病院でしっかり基本を身につけ、訪問看護に移行してもらいたい。

感じており、漠然とした学士課程学生に対する訪問看護師の思いを捉えた。

【新卒訪問看護師育成に対する課題】は、＜新卒訪問看護師育成に対する不安＞＜新卒訪問看護師育成に対する困難感＞の2つのサブカテゴリーで構成された。「現場の教育者の育成にも力を入れなければならないと思う。」や「事故や失職、ストレスも大きく、一緒に働くこと・未来に指導していくことに不安がある。」のように、新卒訪問看護師育成に対する不安を抱え、「新卒で訪看を実践するには、かなりスタッフの数が充実した施設でないと困難だと思う。」「新卒です

ぐに訪看をする事は大変な事だと考える。」「病院でしっかり基本を身につけ、訪問看護に移行してもらいたい。」といった在宅で新卒看護師を受け入れることへの懸念が強く、新卒訪問看護師育成に対する困難感を感じていた。

#### Ⅳ. 考察

##### 1. 新卒訪問看護師育成を肯定的に捉え学士課程学生に求める思い

新卒訪問看護師として就職する可能性のある学士課程学生に対し、訪問看護師が期待する内容について明らかにすることを目的に、自由記述により回答を求め、内容分析を行った。その結果、5つのカテゴリーが抽出され、そのうち【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】の3つのカテゴリーは、新卒訪問看護師育成を肯定的に捉え、訪問看護師にとって必要な能力や資質の具体的な内容や思いが示された。

学士課程で要請される看護師の看護実践に必要な5つの能力群は、『ヒューマンケアの基本に関する実践能力』『根拠に基づき看護を計画的に実践する能力』『特定の健康課題に対応する実践能力』『ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力』『専門職者として研鑽し続ける基本能力』である<sup>6)</sup>。【訪問看護師に必要な看護技術】とは、＜基本的看護技術の習得＞＜総合的なアセスメント能力＞＜コミュニケーション能力の習得＞＜制度の理解＞というサブカテゴリーが構成要因に挙げられた。これはまさに看護実践に必要な能力群『ヒューマンケアの基本に関する実践能力』『根拠に基づき看護を計画的に実践する能力』『ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力』に含まれるものであり、＜終末期の経験＞においては、『特定の健康課題に対応する実践能力』に含まれるものといえる。つまり学士課程において卒業時に到達すべき目標は、在宅の現場でも求められている内容であった。訪問看護師に求められるのは、地域包括ケアを推進する人材としての生活と医療を統合するマネジメント能力を持つことである<sup>7)</sup>というように、医療やケアのマネジメントとチームアプローチを推進していく能力の重要性が指摘されているが、今回＜総合的なアセスメント能力＞には「他医療機関、特に医師・ケアマネともしっかりとアセスメントをして情報を伝え指示をもらわなければならない。」という意見が見られ、まさに在宅の現場で日々行使されている看護能力であり、学士課程学生に対しても訪問看護師が切に期待していることが明らかになった。

そして、【訪問看護師に必要な看護技術】は＜一人で判断する能力＞＜臨機応変な工夫＞＜期待に沿ったケアを展開する能力＞の構成要因も挙げられた。訪問看護師は療養者の家庭に一人で訪問し、簡単に相談できる医師や他の看護職が身近にいないため、対象者の病態を正確に観察し、自律的に判断する臨床能力が求められる<sup>8)</sup>と言われている。定められた頻度と時間で、最大で最善の看護を提供する訪問看護師にとって、即時の判断力や臨機応変な対応は必要不可欠であり、新卒訪問看護師育成を肯定的に捉え今後の在宅看護の在り方を視野に入れたとき、学士課程学生に求める思いとして表出されたといえる。

また、在宅の現場で重要視される生活の質の維持・向上には、療養者・家族中心の看護援助が必須である。在宅看護計画立案の基盤となる能力には、個別性を具体化する力、療養者・家族の心に寄り添う力や意向に気づく力が必要であるとしている<sup>9)</sup>。このように訪問看護師にとって看護計画を立案する際には【訪問看護師に必要な資質】の＜個別性の尊重＞＜価値観の尊重＞＜信頼関係の重要性＞のような個別性や価値観を尊重する看護が求められる。そして、そのような個

別性に沿った看護を展開する上で信頼関係は非常に重要であり、学士課程学生に対しても期待していることが明らかになった。

訪問看護師として自律的な看護実践能力を育むためには、机上の学習ではできず、まさに現場でこそ培われるものであるとし、現場での新卒育成は現場の組織体力の向上となる<sup>10)</sup>としている。つまり【現場で在宅を学ぶ姿勢】は、新卒訪問看護師育成に欠かせないものであり、学士課程学生に対して期待する姿勢のみでなく、＜現場スタッフの日々の努力＞という共に学び育てるという姿勢を、本研究対象者である訪問看護師も感じとっていたといえる。

本研究対象者の約8割が学生指導経験者であり、【看護学生に対する思い】とは、臨地実習の場での学生の姿が反映されているともいえる。「頑張ってください。」「期待している。」のような期待をする一方で、「質の低下を感じる。」「やる気のない生徒が多い。」という批判や指摘と取れる痛烈な意見も見られた。訪問看護師は学士課程学生に将来を期待するが故に、看護職者になる者の責任や自覚の必要性を感じ、具体的な行動や姿勢に限定せず、学士課程学生に対する思いとして大きく捉えている側面が示された。新卒訪問看護師育成の充実に必要な一要因として、実習での学士課程学生の姿は少なからず影響を与えていることが考えられ、大学としては、実習施設との連携を強化し、訪問看護に積極的に興味を持てるような動機づけや学士課程学生の実習に対する目標を具現化できるような指導の検討が急務であることが示唆された。

## 2. 新卒訪問看護師育成を否定的に捉え課題を挙げる思い

5つのカテゴリーのうち【新卒訪問看護師育成に対する課題】は、新卒訪問看護師育成を否定的に捉え、現場で新卒看護師を育成していくことに対する不安や困難感が示された。

病院で育てられた高い臨床能力がすべてそのまま在宅看護で適用できるとは限らず、保健師が新卒保健師を地域で育てるように訪問看護師になりたい新卒看護師を訪問看護ステーションで育てるという考え方はごく自然である<sup>10)</sup>としている。しかし、訪問看護師の具体的な意見として「現場の教育者の育成にも力を入れなければならないと思う。」「新卒で訪看を実践するには、かなりスタッフの数が充実した施設でないと困難だと思う。」「未来に指導していくことに不安がある。」とあり、組織としての不安や困難感が示された。先行研究では、新卒訪問看護師育成の今後の課題として、訪問看護師としての慎重な適性判断が必要であり、組織としては、プログラムの具体化と同時に、育成できる人材の育成と訪問看護が自然と学べる現場力のある組織作りが重要と述べられており<sup>2)</sup>、教育体制の整備、技術の習熟の効率性、技術を実施するための安全管理体制の確保、2年目以降の現任教育が今後の課題として示されている<sup>11)</sup>。約1割が管理職である本研究対象者が、このような課題を具体的に思案した可能性はある。教員や訪問看護ステーションの管理者自体に、3～5年くらい病院での臨床を経験してからという根拠のない意識があって壁を高くしている現実がある<sup>3)</sup>と報告されており、「新卒ですぐに訪看をする事は大変な事だと考える。」「病院でしっかり基本を身につけ、訪問看護に移行してもらいたい。」といった今回の率直な思いは前述と同様の意見である。半数以上が訪問看護師経験10年以上の本研究対象者は、これまでの様々な努力や苦勞してきた経験を振り返り、在宅の現場の厳しさを痛感しているが故の思いであり、新卒訪問看護師育成に対して安易に肯定的になれない真相が示されたといえる。

在宅看護の現場のニーズとして、新卒訪問看護師育成を肯定的に捉え学士課程学生に対し看護実践能力の基礎から在宅特有の能力まで幅広く期待する一方で、新卒訪問看護師育成に対し安易に肯定的になれない思いが明示された。実際の取り組みとして、教育機関ではシームレスな継続教育システムとして訪問看護師を志望する看護師に向けた新任期の教育を現場と協働して行い、



卒後も継続して教育を支援する体系が実現している<sup>10)</sup>。また、病院における臨床経験がむしろ訪問看護師の揺らぎの原因となることが指摘されており<sup>12)</sup>、今後は生活の場に新卒で就職することも前提とした教育体制も考慮しなければならないと言われている<sup>13)</sup>。現場が期待している学士課程学生の看護実践能力の向上のみならず、今後は多機関が協働して新卒訪問看護師を育成していくことが必至であり、その中で大学等の教育機関はその役割を十分に果たせるようなカリキュラムの編成や、学士課程学生のキャリアスタートに在宅が選択肢の一つとして選択できるような地域社会との協力という長期的な視野が求められていることが示唆された。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究対象者が所属する訪問看護ステーションは、新卒訪問看護師の受け入れ体制は整えているが実際には所属しておらず、学士課程学生に期待する内容は、予測的な視点で語られた可能性がある。その点では、学士課程学生に対する期待を十分に一般化するまでには至らなかったことが限界である。今後、新卒訪問看護師が誕生し、その実態を踏まえたうえでの調査となれば、大変貴重なデータとなることが推測される。

## V. 結語

訪問看護師の学士課程学生に対する期待の内容は、【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】【看護学生に対する思い】【新卒訪問看護師育成に対する課題】の5つのカテゴリーで構成された。

訪問看護師は、【訪問看護師に必要な看護技術】【訪問看護師に必要な資質】【現場で在宅看護を学ぶ姿勢】といった訪問看護師になるために必要な内容を学士課程学生に求めている。また【看護学生に対する思い】といった学士課程学生に将来を期待するが故に看護職者になる者の責任や自覚の必要性を指摘する側面が示された。

そして【新卒訪問看護師育成に対する課題】のように、現場の教育体制や大学での教育内容などから新卒訪問看護師育成に対して懸念し、不安や困難感といった否定的な感情を抱いているという課題が明示され、その背景には実習での学士課程学生の言動が反映されていることも予測でき、今後大学としては実習施設との連携を強化し、教育機関の役割を十分果たすための検討が必至であることが示唆された。

## VI. 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただきご協力くださった協力者の皆様と一般財団法人Aに心より感謝いたします。

## 文献

- 1) 一般社団法人全国訪問看護事業協会：訪問看護アクションプラン2025, 2015
- 2) 吉本照子, 辻村真由子, 椎名美恵子他：訪問看護ステーションにおける継続教育の機能向上 新卒訪問看護師育成の実践事例から, 日本在宅ケア学会誌, 18 (1), 27-30, 2014
- 3) 山田雅子：新卒訪問看護師の就業と育成に取り組む「きらきら訪問ナースの会研究会」, コミュニティケア, 17 (13), 134-135, 2015



- 4) 輿水めぐみ：新卒訪問看護師育成のための教育プログラムを開発，コミュニティケア，17（13），122-126，2015
- 5) 一般社団法人全国訪問看護事業協会：訪問看護ステーションにおける新卒看護師採用及び教育のガイドブック策定事業報告書，2016
- 6) 文部科学省：大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会最終報告，2011
- 7) 河野あゆみ：本学学士課程における在宅看護教育の展開，大阪市立大学『大学教育』，10（2），53-54，2013
- 8) 長江弘子，谷垣静子，乗越千枝他：生活と医療を統合する継続看護の思考枠組みの提案，インターナショナルナーシング・レビュー，35（4），89-94，2012
- 9) 田口理恵，河原智江，西留美子他：在宅看護過程における看護計画立案の基盤となる能力，共立女子大学看護学雑誌，2，1-9，2015
- 10) 長江弘子，吉本照子，辻村真由子他：自律的な新卒訪問看護師を育成する 看護学基礎教育と現任教育とのシームレスな協同的継続教育の提案，看護教育，54（10），920-926，2013
- 11) 角田直枝：病院との新卒訪問看護師育成連携による効果と病院への交渉のコツ，コミュニティケア，18（10），10-14，2016
- 12) 中村順子：訪問看護ステーション管理者による新人訪問看護師への関わり；安心して訪問を任せられるようになるまで，日本看護管理学会誌，13（1），5-13，2009
- 13) 中村順子：これからの訪問看護と在宅ケアの未来 看護教育から考える，日本在宅ケア学会誌，20（2），12-17，2017

## Expectations of visiting nurses toward students studying for a bachelor's degree in nursing-Results of content analysis based on free description

Sumiyo Nabeshima, Shinobu Matayoshi, Risa Maki, Junko Nishimura

*Sugiyama Jogakuen University School of Nursing*

### Abstract

**Purpose:** The aim of this study was to elucidate the content of visiting nurses' expectations towards students studying for a bachelor's degree in nursing.

**Methods:** Questionnaire forms were mailed to visiting nurses. With reference to the goals to be attained at the time of graduation in a nursing bachelor's degree course (written on the questionnaire), the visiting nurses freely expressed their opinions in writing.

**Results:** 164 of 203 visiting nurses cooperated in the survey. The visiting nurses' expectations toward the students studying for a bachelor's degree comprised five categories: Nursing skills needed by a visiting nurse, Qualities needed by a visiting nurse, Learning attitude of home nurses on site, Thoughts toward nursing students, and Issues in the training of new nursing graduates.

**Conclusion:** Visiting nurses sought Nursing skills needed by a visiting nurse, Qualities needed by a visiting nurse, and Learning attitude of home nurses on site as things that nursing students need to become visiting nurses. Aspects indicating the need for responsibility and self-awareness in nursing students for expectation for the future were also shown, as expressed in Thoughts toward nursing students. The issue of having negative emotions of anxiety or feelings of difficulty was also indicated for newly graduated visiting nurses. It may be predicted that this reflects students' words and actions in practical training, suggesting that in the future universities will need to cooperate more closely with learning facilities and consider ways to adequately fulfill their roles as institutions of learning.

**Keywords:** visiting nurses, nursing students, expectation